天の猟犬＊他人の血

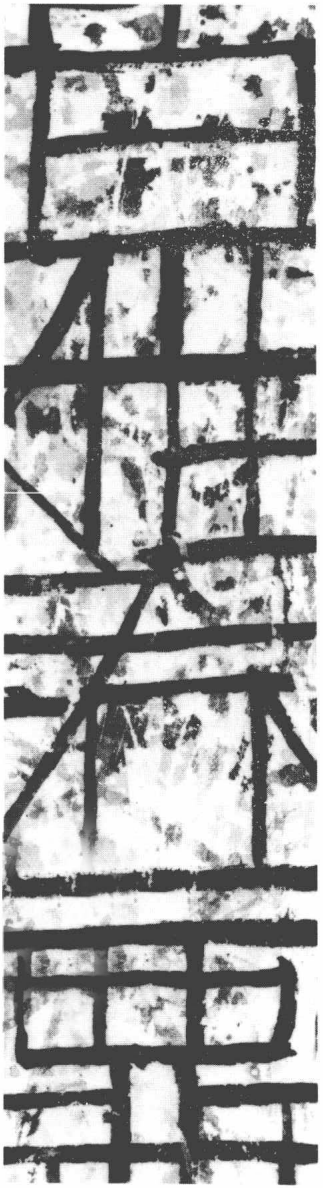
森 禮子

文藝春秋

天の猟犬＊他人の血

森　禮子

文藝春秋



■著者略歴

昭和3年7月7日、福岡に生れる。本名、川田禮子。
昭和21年3月、福岡県立福岡高等女学校卒業。
「モッキングバードのいる町」(「新潮」昭和54年8月号)で
第82回芥川賞受賞。
《著書》「モッキングバードのいる町」(新潮社)。
「五島崩れ」(主婦の友社)。
「愛と迷いと」(聖文舎)。
「光るひととき」(主婦の友社)。

© Reiko Mori, 1980

天の猟犬＊他人の血

定価 1200円

昭和五十五年七月十五日 第一刷

著者 森禮子

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 (〇三)二六五―一二一一

印刷 精興社

製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《目次》

天の猟犬 5
薄暗い場所 35
狂った時計 63
がらんどう 109
他人の血 133
〈あとがき〉 237

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

《作品集》

天の猟犬 ―*― 他人の血

《装画》　赤星　孝

《ＡＤ》　坂田政則

天の猟犬

落葉松林の高く伸びた梢の葉さきに、真夏のままの濃い青空があった。

茂り放題の下草に埋もれた山小屋の戸口に佇み、くすんだ眼差しで女は空を見上げていた。麦稈帽子の後から油気のない長い髪がはみだし、洗いざらしのシャツブラウスに、赤や青の泥絵具でごわごわに汚れたGパン、古雨靴のなげやりな身なりで、片方の肩に萎えたリュックサックをひっかけている。しかし女は、出かける決心がつきかねていた。

八月の終り近く、周辺の高原には、はやばやと人の気配が絶えていた。

山小屋の裏手で、ふいに風が立ったように軽いリズムで草の葉がすれあう音がした。くすんだ眼差しにうっとうしげな色をみせて、女は空から視線をおろした。振り返らなくても、山小屋の裏の物置から犬がでてきて、軀を掻いているのだとわかった。垂れた大きな耳の片方がちぎれ、灰褐色の毛がところどころ抜けおちて瘡蓋になった大きめの中型犬が、林の下草のあいだに尻を

据え、後脚で忙しく首筋を掻いている恰好まで心に見えた。さらけだした薄桃色の下腹は雄犬の性徴があるのに妊み犬そっくりにふくらみ、後めたげな濁った暗い眼の端には、濃いめやにがべったり垂れている。

女は乱暴にリュックサックをゆすりあげ、林の外へ歩きだした。ひとあしごとに茂った下草がさざなみをたて、雨靴の下で枯れ散った落葉松の小枝が鳴る。

やや離れた後から、いくらか軽いおなじ音が蹤いてくる。犬がなぜ、またいつの頃から、喘ぎ喘ぎしか歩けない病んだ軀で蹤いてくるようになったのか、女にはわからない。半年ばかり前、三十なかばすぎて男に死なれた女が山小屋で暮しはじめた頃、どこからかやって来て物置に棲みついたが、まるで自分の醜さに怯えきっているかのように馴れて近づく気配をみせなかった。もともとは飼われていたのが病気になって棄てられたらしく、女の姿を見かけると卑屈に頭をひくくし、上眼づかいでこそこそと距離をとった。その犬の眼つきと、物置の周辺にただよっている獣の病臭をうとましく思いながら女は、次の瞬間には忘れて、犬が勝手にごみ捨て穴の残飯を漁って命を繋いでいるのにまかせていた。

女はある時から、自分でも不可解な心身の状態に陥っていた。男の死と同時に押し寄せてきた夥しい雑事が一段落して、ひとつだけ残っていた法律上の手続をすませに官庁へ行き、巨大な蜂の巣そのままの建物のなかをあちこちと振りまわされ、耳なれない官庁用語に疲れきって帰宅し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た夕方だった。戸口毎に夫や子供の帰りを待っている気配がただよっている団地アパートの階段をのぼりながら、ふと心の裡に、男が口癖のように言っていた言葉が肉声のまま甦った。〝おれが死んでもめそめそするな。人間が死ぬのはあたりまえだし、魂などというものはありはしないから、骨は海にでも流せ。おまえは自由に生きろ〟――。

女は、足を止めた。同時に、男が言葉どおりに肉体だけでなく魂も残さず立ち去った、と感じた。夕暮の浜辺よりも人気のないアパートの階段に、女だけが取り残されて立っていた。

さまざまな雑事を手落ちなく片附ければ、そのうちに帰って来るとでも思っていたのだろうか……と自分を嗤い、そのまま階段をのぼって習慣的にハンドバッグから取りだした鍵でドアを開けた途端、間違って他人の住居に入りかけた気がした。狭い靴脱ぎのコンクリートの上に何かのチラシが一枚落ちているほかは出かけた時のままなのに、立ちこめている空気がひどくよそよそしかった。見馴れた家具類も厚いガラスの向うにあるもののようだった。

疲れているせいだと女は自分を納得させ、よそよそしい空気を無理に軀でかきわけて中に入ったが、男が愛用していた居間の籐椅子に腰をおろすと、潮が退くように気力と感情が脱け落ちてゆくのを覚えた。頭のなかも空虚で、思いめぐらさなければならないことが沢山ある筈なのに何ひとつ泛ばず、いつもと変らぬ窓の外の団地の風景が、しらじらと書割りめいて見えるばかりだった。自分が生きているのかどうかもあいまいで、ただ自分が陥った状態をみつめる意識だけが、

べつな生きものの眼に感じられるほど鋭く冴えきっていた。気づくと、まるで死者が嫉みぶかく盗んでいったように女の生理も失われていた。

何の前兆もなく女が陥った心身状態は日が経つにつれて深まり、はく息すう息が重苦しく、朝夕配達される新聞の音にも苦痛を覚えた。ぎりぎりまで神経が追いつめられた時だしぬけに電話のベルが鳴り、とっさの本能でそのまま猟好きの亡父が使っていた山小屋に逃れたものの、死んだ感情は甦らず、五官の感覚も鈍くなっていた。手脚には覚えのない青痣が絶えず、食卓の上に汚れた皿小鉢がとり散らかっているのに食事をした記憶がなかったり、明け方だと思っていると急に夜になったりした。が、自分をみつめる意識だけは依然鮮かで、自分でない自分をひきずって生きている女を冷やかに眺めていた。その怜悧で仮借のない眼から逃れられない苦痛が更に現実感を稀薄にし、いつから自分の跫音に重なって犬の荒い息遣いが蹤いてきていたのか、女には思い出すことが出来なかった。

理由なく蹤いてくる苦しげな息遣いがうっとうしく、女が立ち止って振り返ると、犬は怯えた眼色で襤褸の軀をすくませ、汚れた尾を後脚のあいだに巻きこんで逃げ腰になった。女が背をむけて歩きだすと、また荒い息遣いが蹤いてくる。わざと足早になって距離をひろげても、あきらめずにひたすら重い軀を運んでくる。強く追いはらうのも億劫で、蹤いてきても素知らぬふりをとおすことにした。女が山小屋から遠出するのは、一週間か十日に一度、バスで下の町へ行くだ

けで、駅前のみやげもの店に手内職の白樺細工の人形を渡し、わずかな報酬に手持ちの金を足して食糧品や雑貨を買い込んで戻ってくる。犬が蹤いて来ることが出来るのはバス停までで、そこに辿り着くと犬はきまって、急にそっぽをむいた。女から離れ、日蔭にへたり込んで軀を絞るように波打たせながら、汗を大きく垂らした舌先から滴らし、下から重いバスのエンジンの音が登ってきても何の反応もみせず、終点のその停留所でタイヤに砂音を嚙ませてターンしたバスに女が乗り込んでも、見向きもしなかった。

林の外の山道に出たとき、女はもう、蹤いてくる犬のことを忘れていた。落葉松林のあいだのゆるやかな勾配の山道は、駆け下りた雨水が幾筋も溝を剔り、むきだしになったバラスの小石が白く陽を撥ねている。人をおそれぬ蜻蛉が飛び交うなかを、女は捩子がきれかかった機械人形めいた足どりで、ゆっくりと下りてゆく。そのあたり一帯の山林地は、五、六年前にひと山あてこんだ不動産業者が買い取って、車がどうにか通れるほどの道をつけて売りだしたものの、附近に煙草屋一軒ない不便さに買い手がつかず、ところどころに別荘が建っただけで業者が倒産して、道も林も荒れ放題になっている。何軒かある別荘も、盛夏のひとときだけは雨戸が開いて、派手な色の車が止っていたりするが、避暑地らしい華やぎのない空気にたちまち退屈してか、八月の終りを待たずに次つぎに閉ざされてしまう。あとに残った自然は、人間に侵されていた汚辱と近づいている凋落の季節に猛りたつ気配で、陽光は人気のない山道に真夏より白く燃えさかり、側

溝を覆い隠している野草は放恣に草いきれを発散し、交尾をあせる蟬たちは声をひとつにして啼きたてている。

女は、町へ下りて活気のある人間に立ちまじることも息苦しかったが、人気が絶えた別荘地の猛々しく生命力をむきだしにしている自然にも、ほとんど怯えを感じた。だしぬけに男の記憶が撲りつけてくる都会を逃れ、裸木の林のところどころに雪が残っている季節に来て、どうにか呼吸ができる優しい場所を見出したと思った自分の甘さをしたたかに悟った。同時に、一週間か十日に一度、下の町に自分を連れだす最低の生存本能だけが残っていることを、理不尽な罰のように感じた。自分のなかの、もっともあさましいものだけが生き残って自分の姿かたちをとっている。しかし遠からず、わずかな金銭の貯えが尽きる日がくる筈でもあった。

伸びかけた薄の穂さきが銀色に光っている道角を曲った途端、思わず女は歩みを躇わせた。すぐかたわらに、白樺を植え込んだ芝生の庭を持つ瀟洒な別荘が一軒あり、盛夏のあいだも雨戸が閉ざされたままで、有刺鉄線を張った柵沿いに刈萱や通草が簇がり茂っていた。その開かずの家めいた別荘の赤煉瓦のテラスに面した雨戸が一枚だけ開き、テラス脇の水道栓から青いビニールホースが庭の芝生に長ながと伸びて、とぐろを巻いていた。

あやまって明るい舞台に足を踏み入れてしまったような戸惑いを覚えながら、人影がないのにやや安堵して幾足か歩いた女は、ふたたび不意をうたれた。五、六歩先の柵沿いの刈萱の茂みの

蔭から、麦稈帽をかぶった若い男が身を起したのだった。
身を起すと同時に若者は、一瞬、あやしむ眼で女を見た。が、素早く親しげな微笑を泛べて手の草刈鎌の背で麦稈帽の庇を押し上げ、高い顴骨のあたりが赤く火照った、粗野で単純な感じの若々しい顔を陽にさらした。鍛えた筋肉のかたちが見える裸の上半身が陽光をまとったように汗で光り、腋窩の毛が淫らなほど黒ぐろとしていた。
不用意に眼をそらしそこねた女は、仕方なく若者を見やったまま近づきながら、自分の心のなかを探っていた。ほんのかすかでも、揺らぐものを見出したかった。
こんにちは、と若者は言った。他人の心を惹きつける自信のある、狎れ狎れしい声音だった。
無表情のまま女は、若者から顔をはずした。陽光が溢れている落葉松林のあいだの山道が暗く長いトンネルに見え、その一瞬に自分の生の果てを見尽した気がした。ほんとうにもう駄目なんだな、と心のなかの声が言った。
若者は、顔を硬くした。信じられぬ侮辱をうけた眼色を見せ、腹だたしげに手の草刈鎌をひと振りした。鎌の刃が鋭く陽光を斬り、茅草が音をたてて女の行手に飛び散った。女は息をのみ、立ちすくんだ。
同時に背後で、ひくく犬が唸った。
視線を移した若者は、肉感的な唇の端に憐れむような嘲弄するような嗤いを泛べた。敏捷な身

ごなしで足もとを見廻して石を拾いあげ、大袈裟な表情と身ぶりで犬を威嚇した。

とっさに女は、足早に歩きだしていた。犬がいっそう強い唸り声をたて、つづいて背後の地面に小石があたって撥ねる音がしたが、女は振りむかずに足を早めた。躓いたように前のめりにいそぎながら背中に絡みついてくる視線を強く意識し、駆けだしたい気持を抑えるだけでせいいっぱいだった。切り通しのひくい崖下に曲り込んでいる角までが、持ちこたえられぬほど遠く見えた。

崖下に入ってからも足をゆるめず、暫く行ってからようやく女は振り返った。犬が蹤いて来ている気配はなかった。立ち止って耳を敧ててみたが、逃げ戻ったらしく別荘の方角はひっそりしていた。

ふたたび、女は歩きだした。二時間に一本だけ通っているバスは、乗客もすくなく、きっかり時間どおりにやってくる。萎びた月見草の花が縁どっている山道をバス停のほうへ急ぎながら、若者の狎れ狎れしい無遠慮な眼つきが心に甦った。と、理由のない激しい怯えが軀を走った。強い衝撃に似た怯えだった。

息をつめ、女は足を早めた。あの若者が不幸になるといい、と唐突に思った。

遠い山脈の尾根に陽が傾いた頃、女は高原に戻ってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com